

しいのき



年中行事絵と暦

名誉館長 三隅治雄

西の市が過ぎると冬になる、三社祭が来るとやがて夏……などと申します。行事や祭りで暦をよむ、言うなら行事暦、祭祀暦というものがあり、祭りに集まる群衆を顧客とたのむ露天商人などは商売上の祭祀暦をもっていました。古く平安時代に「年中行事の障子」とよばれる、宮廷年中行事の絵に、上に月日、下に行事を添え書きした衝立ついでがありましたが、これは一種の行事カレンダーです。また、後白河上皇の企画で成った「年中行事絵巻」のように絵巻で年間の行事暦を示したものもありました。人間、生きて働いて息災繁栄の生活を期するためには、少なくとも年間の生産活動や暮らし方を予知する暦をもつ必要があり、その暦の節目節目に願望成就の祈りや感謝を捧げる祭事を行ったのです。表紙の浮世絵は、歌舞伎役者と正月行事の繭玉まゆたまの取り合わせで歌舞伎らしく舞玉の字を当てています。年頭に、繭形の餅・団子を柳やミズキにいっぱい付けて養蚕・農耕の豊穰を予祝祈願する農村行事で、大入りの短冊を付けるあたりは歌舞伎風です。

文化財よもやま話

大地に眠る歴史

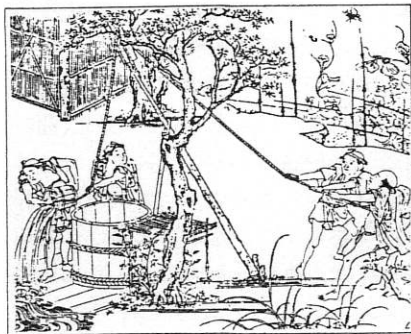
井戸

正月に年男が井戸から若水を汲み、それを使って神仏への供物などを煮炊きする風習は、中野に限らずほぼ全国的に見られます（西日本では女性が汲む場合もあります）。若水とは初々しい水ということで、この水には生気を補う霊的な力があると考えられていたため、その汲み方や使い方には厳重な作法がありました。

この若水の他にも井戸にまつわる習俗は多くありますが、その根底には井戸を神秘的な存在としてとらえる意識があったようです。特に井戸は地中の奥深くに通じていることから、日常の人間の世界とは異なった地下の世界への入口として考えられていました。

例えば区内の上高田では、人が死んだ時にすぐさま井戸に行き、大声で死人の名前を呼んだら死人が生き返ったという話が伝わっています（『中野の昔話・伝説・世間話』）。これは井戸の底が地下の世界、つまりあの世に通じているという考えから、あの世に向かって行こうとする靈魂を呼び戻そうとした魂呼びの方法です。またモノモライになると篩ふるいや笊ざるなどの道具を井戸の上に半分出して「治ったら全部見せます」と言うとお治る、といった俗信が全国的に見られます。これは篩や笊などの呪具でモノモライを井戸の向うの世界にふるい落とそうとするまじないで、ここでも井戸は地下の別世界への通路の役割を果たしています。

このように井戸は生活用水の供給源としてだけでなく、別世界との交流の窓口となる神秘的な存在としても考えられ、人々の暮しの様々な場面に登場していました。

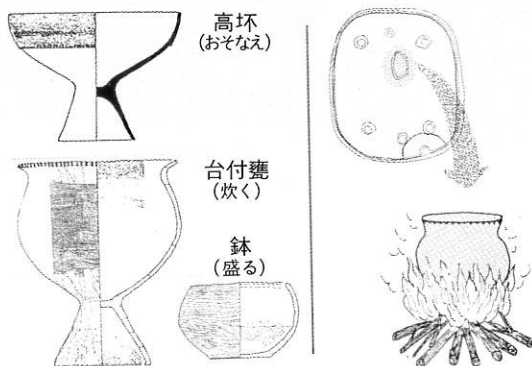


江戸時代の井戸
『絵本世都之時』より

台所物語3(炉)

約1万年もの長い縄文時代が終わりを告げるきっかけとなったのは、大陸から伝った水稲耕作です。これによって今までの狩猟採集に加えて農耕による主食の確保ができるようになり、弥生時代へと移っていきます。

しかし、台所事情は以前と変わりなく、住居の中央にある炉（ろ）で火を焚いていました。ただし米がつくられるようになったので煮る器の形が変ってきました。縄文時代にはたて長の深鉢という土器で貝やドングリ・クルミを煮ていましたが弥生時代になると台付甕といった台のついた甕で米を煮るようになったのです。これは甕に脚台をつけて火のあたる部分を上にあげる工夫をしたもので、熱効率がきわめてよいものです。炉の構造は、住居中央を浅く掘り窪めたものが基本ですが台付甕やまきを置きやすいように、細長い石を置いたものや、甕の破片を埋めてつかえにしたものなどがあります。



▲弥生土器の種類と炉の使用想像図

このように一見、前時代とあまり違いはないように見えますが、米づくりがもたらした影響は、マツリの面に見ることができます。つまり米に霊が宿ると考えられ（穀霊）、発展して農耕の神、すなわち神のイメージが成長したのです。そのため米の収穫が完了すると、新米を神前に供えて、歌舞飲食する（神人共食）ことがはじまります。

これは今の秋祭りのルーツとも言えましょう。

このことにより、器の種類も高杯（おそなえ）や鉢（飯椀）などと様々なものが出てきます。

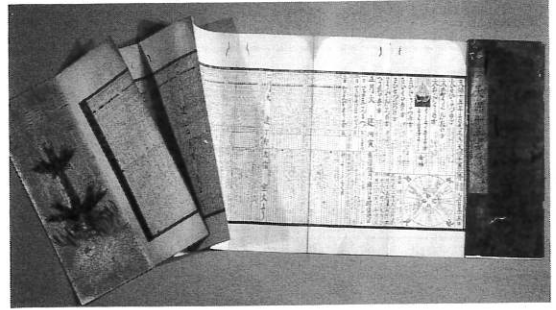
古文書つづり

堀江家の暦

中野村名主の堀江家に伝来し、当館で所蔵する古文書のなかに、写真のような立派な暦が20点ふくまれています。

江戸時代の代表的な暦は、折本の形態を持つ伊勢暦ですが、各地で多様な暦が使用されていました。それらは綴本のものであったり一枚物であったりしますが、折本の形は伊勢暦とその系統の丹生暦だけです。伊勢神宮の御師を通じて、お札(大麻)とともに全国の檀家に土産として配られたため、一地方の暦とは言い難いほどのひろがりを見せたのでした。

こうした伊勢暦は、形の大小、表紙の種類、紙質などを変えて十数種が作られています。上質な鳥の子紙に松竹梅、鶴亀、日月などを金模様で配し、扉には金をちらした若松を描いた、俗に「大名暦」と呼ばれる最高級のものから、表紙もなく半紙を巻いただけのものまで、さまざまでした。



▲堀江家で使われた天保15年(1844)暦

これらは、大麻料の多寡によって差がつけられたといいます。写真の天保十五年(1844)暦は、表紙に金模様はないものの、題箋は金唐紙、扉は金箔をちらした若松です。これは、伊勢外宮の暦師である西嶋左門の版ですが、表紙こそ大名暦にはおおよびませんが、たいへん豪華なもので、当時の堀江家の権勢がうかがわれます。

面白いことに、この暦にはちいさな六曜の早見表が挟み込まれていました。江戸時代後期に普及したといわれる大安、仏滅など、暦上で最大の迷信である六曜が、この頃には一般にまで浸透していたことを裏付けています。

中野往來

中野・犬小屋・お正月

落語の三題話ではありません。区役所の正面玄関脇に中野史跡碑があります。その碑文の中に「犬小屋」の記事があります。

評判の悪い將軍綱吉の「生類憐みの令」により現在の中野駅周辺に犬小屋ができ、犬数万匹が収容されました。江戸八百八町から中野を目指して青梅街道を中野追分でまがり桃園橋を渡り御囲まで二十数年にわたり多数の犬籠が往來したことを思うと珍景であったことでしょう。

蚊を殺したり、鳥に石をぶつかけたり、犬の喧嘩を仲裁しなかったりすると重い罪になり、人々は毎日びくびくして生活していたにちがいありません。

宝永6年(1709)正月に將軍綱吉が死んでまもなく、悪法は廃止されました。これから後江戸に明るい正月がきました。



中野昔話

小僧改名

フーフーポッタポッタってね、お餅がフーツと膨らんで、フートット、フートットとこうやって、ポタポタポタポタたたくんだって。

そのときに、その、お正月にでもね、お寺なんてものは餅が少ないわけなんだよね。そうすつと、和尚さんが、自分で食べたいと思って、この、夜中に、そつとこっそり食べている。それをいつも小僧が眺めていて、何とか餅を食べたいものだど、悪知恵を働かしてだね、そして、「フーフー」にしてもらったり、「ポタポタ」にしてもらったり、名前を付けてもらってね、そして、「はい」って出てくるっていうような話でしょ。

(白鷺 男 明治43年生)

『中野の昔話・伝説・世間話』より

事業報告

各種事業経過

1992年10～12月

事業名	内 容	期 間
企画展	「台所－お勝手のいまむかし－」	10/1～11/14
〃	「暦－描かれた時代－」	12/12～継続中
ミニ展	「酉の市と熊手」	11/5～11/29
講演会	「暦と日本人」 講師 岡田芳朗氏（女子美術大学教授・暦の会会長）	12/13
古文書講座	「入門コース」 講師 大友一雄氏（国文学研究資料館・国立史料館） 白井哲哉氏（埼玉県教育局生涯学習部）	10/3～12/5
史跡めぐり	「新井・寺町コース」 講師 久保恵子氏（中野区文化財調査員）	12/6
文化財調査	鷺宮地域民俗調査 本町二丁目民有地試掘調査 江古田二丁目民有地試掘調査 松が丘一丁目哲学堂公園内試掘調査	4/1～継続中 11/6～11/7 11/27 12/1～12/20
その他	鷺宮篠崎家長屋門移築保存に伴う解体	10/28～12/25



▲「台所展」クイズラリーに挑戦！

寄贈資料一覧

1992年9月～10月
敬称略・受入順

資料名	点数	氏名
板碑	1	近田 一郎
電気冷蔵庫	1	笹川 克巳
伝短	1	白井 勇
大震災写真他	3	山本 広
色紙	1	渡辺 幸雄
農具、石臼、水甕	18	竹内 秀男
柱時計	1	大澤 力治
日清・日露凱旋記念杯	1	山崎 清司
人形	2	福 藏 院
写真	4	小島義三郎
こいのぼり、火鉢	2	平野 進
行李	1	大辻 英昭
農具、御膳籠	111	篠崎 吉紀
かもじ	一式	渡辺 幸雄

◎貴重な資料をありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

NEWS

* 次の企画展は「おひなさま展」です。
2月13日より3月7日まで、2階企画展示室
において、江戸時代から今日までのひな人形
を展示いたします。



▲ 祈 / 千客万来 !!

入館状況

1992年10月～11月（50日間） (人)

一 般	社教団体	学校教育	合 計
5,833	279	777	6,889

発行年月日 1993年1月1日

編集・発行  山崎記念
中野区立歴史民俗資料館

〒165 東京都中野区江古田4-3-4

☎ 03(3319)9221 FAX 03(3319)9119

(印刷物登録番号 4中教社第8号)